新春特別対談

着実に前へ

伊藤公平 氏
慶應義塾長

上野幹夫 氏
日外協　会長
（中外製薬㈱　特別顧問）

中央の書
「独立自尊迎新世紀
明治三十四年元旦」

明治 34 年（1901）元旦、新世紀の幕が開いたその日に書かれた、慶應義塾創立者・福澤諭吉氏の書

新しい年の出発は、学問のすすめ。学ぶことの大切さについて、慶應義塾長の伊藤先生と日外協 上野会長に語り合っていただきました。

AI と人

上野　過去の教育が現在の社会をかたちづくるとともに、現在の教育が未来を方向付けるといってよいと思います。

世界が急速に変化する中、今の教育の何を変えなければならないのか、また変えてはならないことは何かに焦点を当て進めたいと思います。

はじめに AI（人工知能）の進化と教育のあり方についてです。生成 AI が注目を集めています。従来の AI が学習済みのデータの中から選んで回答するのに対して、生成 AI は自ら学習し続け情報を集めてアウトプットします。期待が高まると同時に、人間は何をすればよいのかなど不安も広がっています。より良い活用に向け教育が果たす役割が大きいことは言うまでもありません。

伊藤　生成 AI が登場した意味はとても大きいと考えています。誰にでも使えるインターフェースをもつようになったことで、キーワードを入れるだけで絵や文章ができ上がります。人間がやってきたことを機械が簡単にできるようになりました。私たち技術の専門家はいずれこうなることを予想はしていました。ただ、誰もが同じような使い方をしていたら、同じようなものしか出てきません。どう差別化するのかがポイントになります。中途半端なレベルではない、人間の高い能力が求められています。

上野　知識・意識・気付きといった人間力がますます大事になりますね。

伊藤　機械の上をいく人間力と、専門性を高めていく力、そして学び続ける力が３本柱だと考えています。

学び続ける力とは、それぞれの立場で職分を全うするために学び続けること、会社員であればたとえ配置換えになったり、解雇されたとしても、新しい仕事を遂行できるよう次への挑戦を開始する力です。『学問のすゝめ』には、自らの職分を全うするために、仕事に誇りをもって、より高い目標を目指して努力することの大